

磁石の正体

―鉄を食う怪獣―

岩崎雅彦

北朝鮮の怪獣映画『ブルガサリ―伝説の大怪獣―』（一九八五年）は、日本の特撮チームが製作スタッフに加わったことでも話題になった。高麗王朝末期、鍛冶屋が飯粒から作った像に魂が宿り、針や刀などを食べて次第に大きくなる。巨大化して暴れる怪獣によって王朝は滅びる。この映画のもとになったのは朝鮮の古い伝承である。そして、その源は中国三国時代の仏典『旧雜譬喻經』に遡る。

ある国の王が臣下に、隣国へ行き「禍」（わざわい）を買い求めてくるように命じる。臣下は市で天神が人となって「禍母」という名の「猪」（豚）のような動物を売っているのに出会い、これを買って帰国する。禍母は日に一升の針を食う。これを殺そうとして刺したり切ったりしても傷つくことはなく、死なな。焼き殺そうとすると体が火のように赤くなり、国中を焼き尽くしてしまった。

この話は唐の仏教説話集『法苑珠林』にも引かれ、日本では『宝物集』、延慶本『平家物語』、『因縁抄』、『直談因縁集』、『神道由来事』、『神祇官』、御伽草子『鶴の草子』等の文献に、そ

れぞれバリエーションを持ちつつも広く見られる。日本では、この怪獣の名は「わざはひ」と呼ばれる。これらの《わざはひ説話》については、高橋俊夫、稲田秀雄、内田康、徳田和夫の諸氏による詳細な研究がある。そして、この《わざはひ説話》が狂言「磁石」の構想のもとになったことが諸氏により指摘されている。以下に諸氏の紹介した資料を引用しつつ、これまで指摘されている《わざはひ説話》と「磁石」の関係をまとめてみる。

狂言「磁石」では、男に銭を持ち逃げされたすっぱが太刀を抜いて男を脅す。男は目を剥き、大きく口を開け、手を広げて「ああ」と大声ですっぱを威嚇する。追い詰められた男は太刀を怖がることなく、逆に口を開けてこれを飲み込もうとする。男は、すっぱに問われて自分は磁石（の精）であると名乗る。

延慶本『平家物語』では、漢朝の国王が、わざわいという物ほどのような物か見てみたいと言うと、天から童子が来て大臣に小さい虫を与える。虫は鉄を食って次第に犬や獅子の大ききの獣になる。獣はやがて鉄を食い尽し、

内裏や人家の釘まで吸い抜いて食うようになる。これを弓で射ても剣で切っても切れず、焼き殺そうとしても死なない。そこで僧を集め天童の法を行うと、獣は他国へ出て行き山中で死んだ。そして獣の死後が次のように記される。

死テ後、磁石ト云石ニ成ニケリ。生テ好ミケル物ナレバ、死テ石ト成タレドモ、尚鉄ヲ取物ト成タリケルコソ、オソロシケレ。今ノ磁石山、是也。

鉄を食う獣は死んで磁石となった。室町時代の神道書『神道由来事』では、この説話の舞台を日本に置き換えている。用明天皇が「あぐたの虫」を見たいと言うと、天から虫が下って来る。虫は初めは鉄を食い、やがて山のごとくになり人を食うようになったので、天照大神に救いを求める。天照大神が虫を退治すると、虫は磁石となった。

この虫を、大かはへ入れられしかば、山のごとくに見多しかども、つゝに滅びて失せたりけり。海に、ぎしやくといふ石は、この虫の舍利の岩なり。骨までも、くろがねなり。

『神祇官』の内容は、これとほぼ同じであるが、掲出部の記述は次のようになってい。此虫ヲ大海へ入レ玉へバ、山ノ如ク見ヘシガ、終ニハ滅テ失ニケル。海ニ茲石ト云石ハ、此虫ノ舍利也。去バ、骨ニ成テモ鉄ヲ喰也。

「磁石」で窮地に陥った男が咄嗟の機転で太刀を飲み込もうとするのは《わざはひ説話》に

おける怪獣の生態を踏まえたものである。ここまで、すでに指摘されている《わざはひ説話》と「磁石」の関係をまとめてみた。

以下、私なりに気づいた点をいくつか挙げてみたい。「磁石」では男が自分は磁石(の精)だと名乗る。延慶本『平家物語』や『神道由来事』では、獣や虫は死後にその死体や骨が磁石になる。生前の名はそれぞれ「ワザハヒ」「あくたの虫」であって磁石ではない。《わざはひ説話》では、王が栄華に奢るあまり「わざわいが見たい」と迂闊なことを言うのが話の発端である。したがって怪獣の名は「わざはひ」でなければならぬ。まさに自ら災いを招くというのが、この話の主題である。

「磁石」の構想は鉄を食う怪獣が死んでなお磁石になったとする説話を踏まえているが、生きている物の名を磁石とするのは独自の設定である。延慶本『平家物語』等では、磁石はあくまで死後に石になってからの名称である。《わざはひ説話》では王の不用意な発言が国を危機に陥れるが、「磁石」は、そうした説話の内容・主題とは無関係であり、「わざはひ」という名はそぐわない。男が成り済ます物の名を「わざはひ」ではなく、鉄を吸う鉱物の磁石としたのは、狂言の工夫である。

「磁石」では、太刀を向けられた男が、逆に太刀を飲み込もうとする。絶体絶命の窮地に陥った男は、イチカバチかの大博奕を打って窮地を脱し、すっぱは男に翻弄される。

延慶本『平家物語』では、

凡ソ、其身、鉄ナリケレバ、箭立ツコト

ナシ。劍ヲ以テ切りケレドモ、切レズ。

己レガ好ム物ナレバ、劍ヲモ食ケル間

と記す。獣の体は鉄でできており、矢も剣もまったく通用しない。獣は鉄が好物なので、逆にその剣まで食ってしまう。この場面の描写は、『宝物集』には

箭たつ事なく、切れども、刀たつ事なし。と記すのみで刀を食うという記述はない。同様に『神道由来事』にも

くろがねを、まるめたる身なれば、太刀・刀も立たざりけり。

とするのみである。『旧雑警諭経』には、刺しても、切っても、打っても死なないとする。剣を食ってしまうというのは、延慶本『平家物語』独自の記述である。この部分は、武器が通用しないほど体が堅いという獣の身体的特徴を説明することを目的としており、剣を食うという延慶本の記述は、この前に鉄を食うという記述があるので、やや蛇足の感がある。すっぱは太刀を突き付けられた男が、逆に太刀を飲み込もうとする「磁石」の設定は、延慶本『平家物語』の記述に最も近いと言えるだろう。ちなみに映画『プルガサリ』では、民衆のリーダーが処刑されようとするところにプルガサリが現れて、処刑人が持つ刀を食ってしまう。文字や語りで表現される説話とは違い、役者の演技によって表現される演劇や映像作品では、刀を食う場面が見る者に強い衝撃を与える。殺そうと刀を向けて来る相手に対し、その刀を食おうとするのは演劇・映像向きの場面と言える。

『天正狂言本』『ぎしやくく』では、追い詰められた男(博奕打ち)が「ぎしやくくに化ける」と記す。和泉流天理本『狂言六義』では、男は「じしやくじや」と名乗り、『大蔵流明本』でも「じしやくであるが」と言っている。稲田氏が指摘する通り、近世中期以降の諸台本では男は「磁石の精」と名乗る。これは磁石が鉄を食う怪獣のイメージではなく、抽象的な物の精として捉えられるようになってきたことを意味する。「磁石の精」と言った場合の磁石は、鉄を食う怪獣ではなく、鉄を吸う鉱物ということになる。「磁石」の男は太刀を吸い寄せるのではなく、口を開けて飲み込もうとするのであるから、あくまで鉱物ではなく怪獣に化けているのである。物の精は狂言、中でも風流(ふうりゅう)や間(ま)狂言に多く出る。動物や植物の精以外にも、たとえば「父の丞の風流」には「磁石の精」なる物が出る。色々な物の精が多く登場する狂言では、磁石の精という設定は、ごく自然に受け入れられた。

「磁石」は本来、人間が怪獣に化けるといって荒唐無稽な発想の面白さによる作品であった。見た目は人と何ら変わらないのに「自分は磁石だ」と男が言い張り、すっぱはそれにコロりとだまされてしまう。しかし、この鉄を食う怪獣の存在はいっしか忘れられてしまった。現代の「磁石」は、人間が鉱物の磁石に化けるといって本来とはまた違った、いささかシュールな発想の面白さによって成り立っていると考えるだろう。

(国学院大学非常勤講師)